

埼玉県西川林業地域における新しい森林資源利用について

岩田雄介 (東京農大院)・佐藤孝吉 (東京農大)・箕輪光博 (大日本山代会)

要旨：埼玉県西川林業地域は、首都圏に木材を供給するため、江戸時代より優良材生産に力を注いできた。西川林業地域では、多くの植栽本数と適切な枝打ち、間伐などによって通直、完満、年輪幅が密できれいな材を手塩にかけて育ててきた。ところが現在は、年輪幅が密で無節なきれいな材が評価されず、一般材と変わりがない価格になっている。

本論文では、西川林業地域の現代的な特徴と活動を取り上げることにした。すなわち、わが国の林業が流通の簡素化、低価格化の方向にある中で、西川林業地域のように木材の美しさにこだわり、労働力を投入してきた地域における森林資源利用について考察することにした。林業家や製材業に携わってきた方々の中には、都市近郊地域であるメリットを活かして、顔の見える木材生産により西川材の良さをPRする努力をしてきた。そして、地域のNPOなどの活動を通じて、個別の林業経営から地域に開かれた新しい森林資源利用へと変化してきていた。

キーワード：西川林業、西川材、森林資源利用、顔の見える木材生産、地域林業経営

I はじめに

わが国は、それぞれの地域の自然条件や社会条件によって特徴のある林業を行い、特徴のある木材を生産してきた。その中には、吉野、北山、今須、西川など集約的な施業を特徴とする地域もあれば、日田、天竜など早くから広範囲で植林が行われ、森林資源が豊富に存在する地域もある。集約的な施業をする地域は、良質材を生産し、地域名としてブランド化させ、高価格で販売することによって経営を成り立たせてきた(3)。

現在、木材の乾燥度合いや強度が品質の重点におかれているため、美しい材を生産するために労働力を投入してきた地域は、生産性が上がらず、経営が困難な状況に陥っている(2)。

本論文では、近世以降に木材生産地域として名を馳せてきた西川林業地域が、銘柄材の需要低迷と木材価格の下落の現状の中で、林業・林産業にかかわっている方々がどのように事業を行っているのか、どのように努力をされているのか、そしてそれらの活動をサポートしている方々を把握し、銘柄材の生産地域における森林資源利用について考えることにした。

II 西川林業地域について

1. 林業地域の概要 西川林業地域は、荒川支流の間川、高麗川、越辺川の3流域の中にあり、飯能市を中心とした日高市、毛呂山町、越生町の2市2町に位置している(1)。人口は19万2,130人(2008年12月1日現在)で、区域全体面積は3万1,513haである。東京圏からは西武鉄道で1時間以内にあり、アクセスしやすい。また、飯能市の能仁寺などは観光地として有名である。西川とは、この地域で生産される材が江戸の西方から筏で流されてくることから名付けられたといわれ、実際に西川という地名はない(3, 5)。

2005年の農林業センサスによると、森林面積は2万187haで森林率は約64%(6)である。森林面積のうち民有林面積は2万142haで98%、人工林面積は1万5,936haで79%である。齢級別面積は、10齢級以上が全体の70%である。森林蓄積は全体が571万842m³で、haあたりでは283m³と高い。

2. 木材生産技術 地元の林業家の方によると、本地域の森林施業は次の通りである。植栽本数は、haあたり3,000~6,000本、下刈りは、4~5年生までは7月上旬と8月中旬に2回程度行い、以後は7~8月に1回行う。枝打ちは、25~30年までに2回程度、10~3月にかけて

Yusuke IWATA, Takayoshi SATO(Tokyo Univ. of Agric., 1-1-1 Sakuragaoka, Setagaya-ku, Tokyo 156-8502), Mitsuhiro MINOWA (The Japan Forestry Association, 7F 1-9-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052)

Utilization of forest resources at Nishikawa forestry area in Saitama prefecture

行う。間伐は、林木の成長に合わせて行い、25~30年以下については5~9月に行い、30~40年以上に成長したものは、9月中旬過ぎに行っている。素材生産は、高密度路網を利用し、チェーンソーやトラックを活用して行われている。主伐時は、優良木をhaあたり10~15本程度残し、100~200年の長期に伐期を設定する技術がある（これを一般的に立木という）。昔は、輪組み（山の斜面に杭を打ち、伐った木を積み重ねて乾燥させること）や木馬（木材をのせるための櫓のこと）といわれる独自の素材生産技術があった。素材は、スギの小丸太・小角材・小幅板用を中心として生産をしてきた。

その他の西川林業の特徴としては、分収林業がある。つまり、小規模な森林所有者が高度な造林技術を活用するために、分収契約をして収益性を高めている。

3. 西川林業地域の現状 森林組合や原木センターによれば、1970年代に他の地域の木材が平均2万円/m³であったのに対して、西川材の素材価格は平均4~6万円/m³で約2~3倍で販売されていた。また当時は、奈良県をはじめとした銘柄材で有名な地域からも素材を購入しにきていた。そして、「関東の吉野材」として流通していた。

2000年以降は、素材生産は活発になるが、素材価格は全盛期の3分の1以下にまで下落した。その原因は、住宅のプレカット化による木材流通の変化、需要と供給のバランスの変化などとみられている。その結果、林業・林産業を担ってきた事業体数は1970年代の半分以下となり、結果として造林業12件、素材生産業30件、木材卸売業37件、木材・木製品製造業は35件（4）となった。

ここで西川林業の特色をまとめると、①都市近郊地域であること、②早くから造林が行われ、高齢級・高蓄積の林分が多いこと、③集約的施業によって良質材を生産してきたこと、④分収林業によって生産技術が確立されてきたこと、⑤銘柄材として全国的に有名であったこと、⑥近年は木材価格が低迷したこともあり、林業・林産業に携わる人が少なくなっていることである。

III 森林資源を活用するための取り組み

1. 林業家（I氏の場合） I氏は、西川林業地域を代表する歴史ある林業家である。枝打ちは約6mまで行い、優良木を残す定性間伐で優良材生産を目指している。

また、立て木施業によって大径材も生産している。

素材は、地元の原木市場に出荷している。また、消費者に直接西川材を知り、触れ、良さを体感してもらいたいという気持ちから、1997年に西川のスギ、ヒノキの無垢の木を使用した工房を開いた。この工房では、消費者が西川材を使用して家具などの木工品を作成できることが特徴である。I氏いわく「今は一般的に『無垢材はいい』ということから国産材をPRしているが、私はさらにもう1歩踏み込んで『無垢材の素晴らしさ』を伝えていきたい。そして、お客様には節がある材とそうでない材を比べてもらい、無垢材の良さを知ってもらいたいから工房を開いた」と語っていた。つまり、工房を通じて西川材の美しさなどを消費者が知った上で利用してほしいということだと考える。また、I氏の工房を通じて消費者に対しては、山林の案内なども行っている。その他にI氏は、製材業、設計士、工務店などとグループを作っている。

2. 製材業（O氏の場合） O氏は西川林業地域の中心的な製材業者で、多くの種類の一般住宅用材を中心に製材し、他には神社や仏閣用材も製材している。原木は、周辺地域から購入し、その際は①神社や仏閣などに適しているもの、②天然乾燥によって住宅などの部材に適しているもの、③プレカットの部材として適しているものなどに分けて製材している。なおプレカット工場は、西川材を広めるために1995年に建設され、O氏はこことも繋がりが強い。また、自社で山林も所有し、山側を意識した事業にも取り組んでいる。2008年には、ストックヤードを設置し、天然乾燥材生産にも力を注いでいる。

このように林業・林産業に携わる中心の方は、西川林業の伝統的な良さを引き継ぎ、それらを消費者にPRしながら、継続的な活動を行ってきている。

IV 西川林業を支える取り組み

1. 西川森の市場 西川材を活用して西川の森の保全をし、木の家づくりなどを推進していこうと2008年5月に設立した。I氏によると、活動内容は、①西川材を知ってもらうために間伐体験や講座を行う、②本物の西川材を提供し販売する、③市場を通じて西川材につけた付加価値を伝えていくなどである。西川森の市場は、森林所有者、森林組合、木材業者、設計事務所、行政などの方々が集える場所を目指している。

2. 西川材トレーサビリティ推進協議会 平成20年度地域木造住宅市場活性化推進事業で、「オンデマンド型木材流通の実現に関する事業」として活動している。活動内容は、地域木材の需要に応じた適時の供給を行うため、履歴情報および在庫管理システムの開発(9)である。履歴情報としてはICチップを使用し、約160バイトの情報が書き込める。どこの誰の山でいつ誰が伐り、いつ造材し、いつ誰が製材していつ家の材料として使われたかなどの情報がこのチップに書き込める。そして、家の柱を調べるとどんな人が育てたのか、どこの山から切り出された木なのか、その山は今どうなっているのかなどを知ることができる(8)。今後、西川材に付加価値をつける1つの工夫として注目される。

3. 木の家だいすきの会 無垢の木や自然素材を活かした家やまちに暮らしたいと願う人たちと、そうした家づくりに携わる建築家や職人たちが集まる会として2000年11月、S氏が中心となって設立した。会の目的は、①住まい手と山(木材産地)とのネットワークによる家づくり、②武蔵野の風土に根ざした家づくり、③住まい手とつくり手の顔の見える家づくりで、山の緑の保全や人と自然が共生する家づくり・まちづくりに貢献することである。

活動内容は、①「木の家」づくりのサポートネットワークの構築、②「木の家」づくりに関するセミナー、見学会の開催、③「木の家」づくりに関する個別相談、設計者の紹介、④「木の家」づくりに関する支援、⑤国産むく材をはじめとする自然素材や地域風土に関する調査研究活動、⑥自然素材や風土を理解し地域で活動できる専門家等の育成、⑦自然素材や地域性を活かした住宅の行政機関等への提案、⑧市民による山の緑の保全、自然と共生する住まい・まちづくり活動への支援(7)である。

西川林業をささえる地域の取り組みは、生産者側だけでなく、消費者側あるいは地域として西川材の特徴を活かす取り組みが多く見られた。そして、流通段階で消費者とのつながりを深める取り組みが多く見られた。

V 新しい森林資源利用について

1. 森林資源の活用と西川林業を支える取り組みとの関係 IVで取り上げた消費者や地域住民に協力を呼びかける組織は、優良材生産を目標とし、半分以上は

同じメンバーであった。そして、多くの人に西川材を知ってもらい、実際に触れ、良さを伝える機会を設ける必要があると考えていた。つまり、西川材の活用を供給側から支える西川森の市場や西川材トレーサビリティ推進協議会と、消費者側とをつなぐ木の家だいすきの会である。これらの双方からの活動によって、個々の活動から地域としての活動へと広がりつつあることがわかった。

2. 新しい森林資源利用とは 西川林業の特徴、林業家、製材業者、そして、西川林業を支える人たちの取り組みから新しい森林資源利用について考察する(図-1)。

昔ながらの西川材利用は、林業家が山づくりをして原木市場に販売し、製材業などの木材加工業が原木を購入して製品として販売し、住宅などとして消費者へと利用され、個々の生産者が垂直的につながっていた。そして、1990年代後半より木材の価格低迷に対応するために、関連業者が中心となり協力体制やPRなどにより木材に付加価値をつけたり、西川材の消費者へのPR活動なども行ない、いわゆる顔の見える木材生産へと展開してきた。それは、林業家が直接消費者に接し、製材業者が住宅展示場などを通じて直接みて、触れて、感じられる機会をつくることであった。

しかしながら、2000年に入っても続く木材価格の低迷は、顔の見える木材生産では、量的にも対応する人材という視点からも十分ではなく、後継者不足や手入れ不足など生産技術の継承問題を引き起こすに至っている。このような状況に対して、消費者や地域住民の中にはその伝統を知り、継承しながら森林管理と公益的機能を高める動きが見られるようになってきた。

このような活動は、今まで林業・林産業に携わっている人たちが、個々に努力してきたものとは異なり、地域の産業間の連携をつなげ、顔の見える木材生産を含んだ、地域全体の新しい森林資源利用のスタイルである。

3. 新しい森林資源利用の方向性 西川林業地域における新しい森林資源利用は、集約的な林業を行ってきた新しい地域林業の方向性を示唆するものであると考えられる。特に西川地域のような都市近郊地域という特徴を活かした地域住民との面的な広がりや、注目する点である。この活動では、西川林業を支えるNPOの活動が鍵を握っているといえる。その点において、I氏、O氏のよう

な生産者とS氏の活動ができるようなリーダーの存在は必要不可欠である。

林業のように生産期間が長い産業では、継続した事業を行うための人材育成やアイデアが必要であろう。つまり、継続した技術の継承、継続した生産、継続したサポートをどのように行うかが重要である。その点を考慮しながら、今後も引き続き研究に取り組みたい。

謝辞

調査の実施にあたっては、たくさんの方々に格段のご高配とご協力を賜った。この場を借りてお礼申しあげる。

引用文献

(1) 飯能市郷土館 (2007) 飯能の西川材関係用具 4pp., 埼玉.

(2) 遠藤日雄 (2005) 木づかい新時代 171pp~173pp., 日本林業調査会,東京.
 (3) 野村勇 (1952) 西川林業の成立と概況,24pp.,林業経済研究所,東京.
 (4) 埼玉県 (2007) 埼玉地域森林計画書 114pp.,埼玉.
 (5) 丸善 (1984) 新版林業百科事典 777pp.,東京.
 (6) 埼玉県農林部森づくり課 (2007) 森林・林業と統計 8pp.,埼玉.
 (7) 木の家だいすきの会パンフレット (2008)
 (8) 木楽里ブログ (2008年2月12日)

<http://k-kirari.jugem.jp/?eid=277>

(9) 平成20年度地域木造住宅市場活性化推進事業採択事業一覧 (2008年10月20日)

<http://www.mlit.go.jp/common/000029706.pdf>

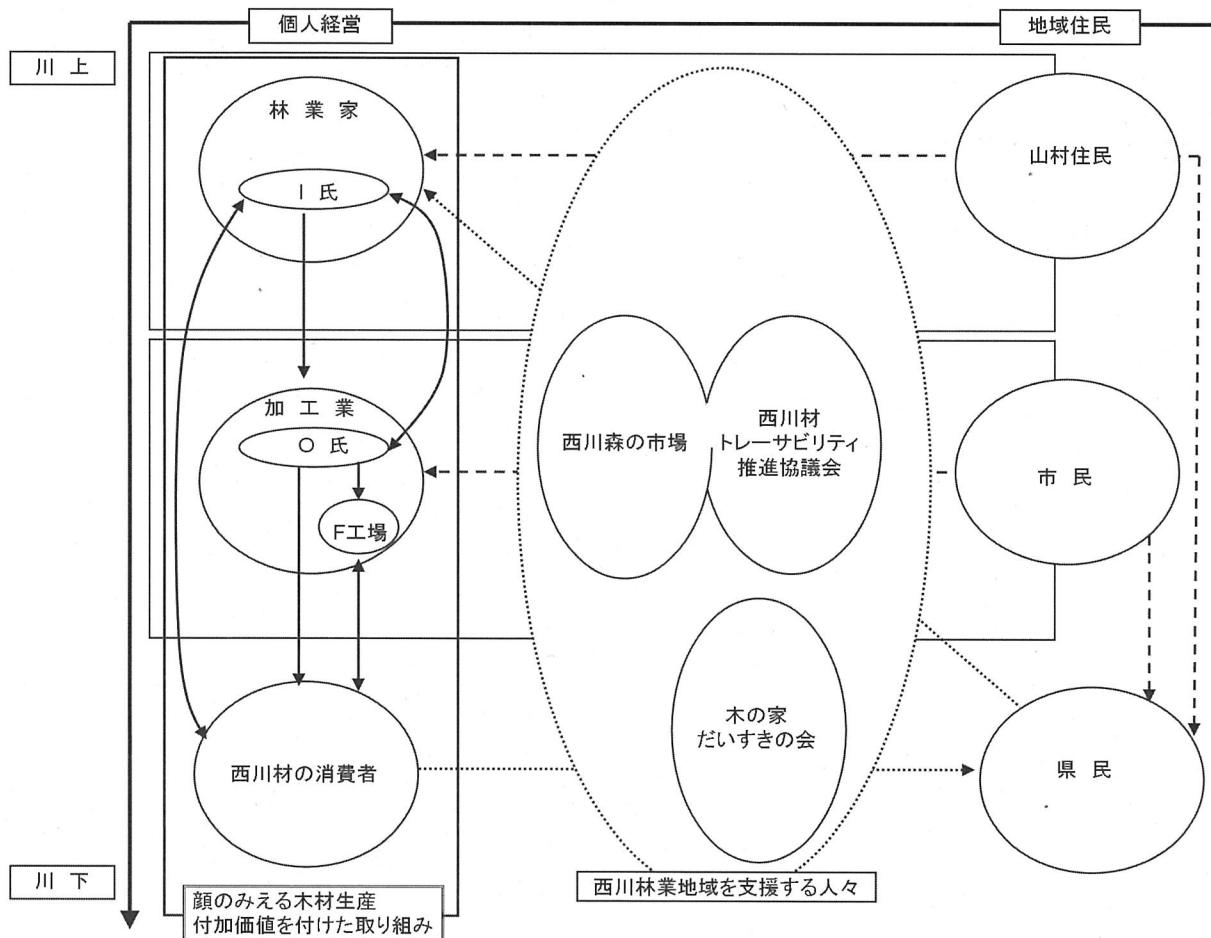


図-1. 新しい森林資源利用のかたち

- ・ 実線は調査によって明らかになった森林資源利用の現状
- ・ 点線は新しい森林資源利用の方向性
- ・ 破線は今後の研究課題